

《書評》

三木与吉郎編 『阿波藍譜 史料篇』 全3巻

(1974年12月、三木産業株式会社刊)

安 岡 重 明

I

三木産業株式会社は、かねてより阿波藍に関する重要な著作や資料集を発行して今日にいたっている。『阿波藍譜・栽培製造篇』（昭和35年刊）、『阿波藍譜・史話図説篇』（昭和36年）、『阿波藍譜・外篇』（昭和39年刊）、『阿波藍譜・精藍事業篇』（昭和46年刊）などである。これに関与しておられる三木与吉郎氏や後藤捷一氏の御努力は並々ならぬものがあるだろうと、私はかねがね敬服していた。

これまでの刊行物は、どちらかといえば、阿波藍の栽培技術、加工技術などの記録・紹介に重点がおかれていたようであって、それ自体まことに貴重な仕事であったが、われわれ経済史や商業史の専攻者にとっては、幾分間接的な部分が多かった。

今回刊行された『阿波藍譜・史料篇』は上巻693頁、中巻523頁、下巻673頁、合計1900頁弱の大史料集であって、経済史、商業史関係の史料がほとんどを占める。

阿波藍は周知のように、近世経済社会における特産物の一つとして、とくに目立った存在であった。農業が主として食料生産であった時代にも、食料以外の工業原料生産物が農地で栽培されるようになった。綿・藍などはその最重要の産物であり、これらはごく一部が自給用に消費されたほかは、他地域へ販売され、これを通して、江戸期における商品経済の発達がうながされたのであった。

こうして藍もまたその生産地の経済構造を変え、他地域の経済にも多大の影響を与え、ひいては日本経済の様相を変化させるのに寄与した作物の一つであった。このような意味をもった藍の歴史が、今回の史料集の刊行によって研究されやすいようになったことを喜びたい。

われわれは、すでに阿波藍に関しては西野嘉右衛門著並びに刊『阿波藍沿革史』（昭和15年）をはじめ、徳島県編『阿波藩民政史料』（大正3年，同4年刊）『絵具染料商工史』（大阪絵具染料同業組合編並びに刊，昭和13年）などのあることを知っているが、阿波藍史料に関しては、今回の『阿波藍譜』史料篇は、質と量の双方において類書と比較にならないくらいすぐれたものであって、長年にわたる阿波藍の調査研究の成果が結実したものといえるだろう。

II

本史料集の特色をまずのべてみよう。

1. 時代的に永正・大永という16世紀の初めから，昭和18年の阿波藍同業組合人員郡別表にいたるまで，きわめて長期間にわたる史料集である。
2. 史料収集の地域的拡がり，広大であって，収録史料の地域範囲は，関東以西の日本各地に及んでいる。
3. 史料の関係分野が広く，阿波藍に関する産業，商業事情に関する史料が収められている。

目立った特色は以上の三点のうちに含まれていると思うので，つぎに，この三点のそれぞれから，紹介と解説を加えてみたい。

第一 史料の収録年代について。

本史料集に収録された史料は，阿波藍についての史料原本や史料蒐集時の稿本を中心としているが，一部の史料については刊本に記載された史料を引用収録している。

その際の選択基準は明示されていないが，証文，報告，契約，帳簿，願などの原本または原本の複写を基準にしているようであって，非常に堅実な史料集となっている。この点はまことに敬服すべき点ではあるが，一方若干の不備な点を伴っているのではないだろうか。

たとえば，ある国，ある地方で，藍の移入が始まったときの様子，藍染，藍作りなどの開始の様子などを示す直接の史料はないが，それが伝承で伝えられている場合などである。伝承は伝承としての証拠力しかないが，事の始まりに関する史料は残りにくいのが普通であるから，伝承の記述なども，場合によっては大変参考になる。だから，望蜀の感はするが，これらの伝承の重要なものも採録した方がよかったのではな

いかと思った。

そうすれば、藍取引、藍染、藍作などに関して全国的な普及の様子が一段と展望しやすくなったのではないか、と思った次第である。

第二 史料集録の地域範囲について。

本書に収められた地域範囲はずいぶん広範である。これらをそれぞれの地方の個人宅や図書館・文庫などで収集された労力は多大なものであったろう。これを可能にしたのは編集者の熱意であり、まったく敬服に価する。

阿波藍の史料集であるから、徳島の史料は多いのは当然だから、これを除くと、江戸時代分の史料収集の範囲はつぎようになる。

関東地方——江戸、武蔵

中部地方——尾張、伊勢、信濃、甲斐、佐渡、越前、若狭

近畿地方——京都、山城、大和、摂津、大阪、堺、泉州

中国地方——備前、安芸、因幡、伯耆、周防、長門

九州地方——熊本、鹿児島

四国に関しては讃岐と伊予について若干の記事があるが、件数は多くない。

上記のうちでとくによく登場する土地は、やはり、阿波藍の取引が多かった京都、大阪、江戸が目立つが、阿波藍と対抗して藍生産を発達させようとしていた地域——摂津、尾州、安芸、鳥取、長門などの藍生産に関する記事もよく出てくる。

ただ東北地方が登場しないのはなぜだろうか。仙台藩や米沢藩は藍の移入を阻止するため、自国産の藍作を奨励して作らせるようになったのは18世紀の中後期からであった(例えば『鷹山公世紀』大正13年、211頁、など)。こうした関係の史料は入手できなかったのであらうか。

第三 阿波藍に関する多面的な史料が収められている点について。

この点に関しても、史料の範囲が広い。藍の生産については阿波藍の生産・加工だけでなく、尾州、摂州、安芸、山口等の藍の生産・取引・品質に関する史料が多い。

流通に関しても、領内の取引のみならず、阿波特産としての藍が各地でどのように取引されていたかを示す史料、各地の藍問屋、仲買の定法、組織、構成員などの関連史料を多数収めている。代金授受に関する紛争の文書も多く、取引上の問題点がわかる。また加工業の実態もかなりあきらかになる。本史料集には紺屋の史料が多く、藍染仲間の史料とともに、染色業者の業態や仲間の組織のことがわかる。

そのほか、私にとってとくに有難いのは、藍に関する諸藩の政策史料があることである。江戸時代中期以降、米価の下落のため、幕藩領主は財政難に苦しみ、比較的高価に販売できる特産物の生産に力を入れ、これを領外にできるだけ高く売り出す政策をとった。これによって幕府の直轄大都市中心の経済政策、商業政策はくずれはじめ、のちに幕藩制が解体する最大の条件のひとつになるのであるが、じつは、阿波藍の生産、流通の歴史は、この問題を鮮明にするのに貴重で、かつ代表的な事例なのである。

しかも一藩のこうした政策は、藩と幕府直轄都市（ひいては幕府）との間に緊張を生んだだけでなく、藍を買って消費していた国々にも一定の影響を与えたので、諸藩はこれに対抗して、藍の生産を開始し、藍の自給を試みたので、江戸後期には、阿波藍も安閑としておれなくなる。

尾州藩、芸州藩、長州藩などの藍に関する政策の史料が収められているので、この方面の研究には、まことに好都合である。

以上、江戸時代の史料の概要を紹介してきたが、下巻は明治以降の史料集であり、この期に関しても、江戸期と同じく多面的に史料が収録されていて、有用である。藍商社や藍商仲間に関する記録は、まだ未開拓である近代商業史研究、問屋制度研究にとってよいデーターを提供してくれる。

私は、近世近代経済史（産業史・商業史を含めて）を専攻する者は、あれこれの史料をばらばらにみるよりも、ある程度の基礎知識を得たら、直ちにこのような史料集の解説に取りくんだらよいのではないかと思った。それによって具体的な一産物を通して、近世・近代経済史のほとんどすべての問題に直面することができ、かつ実感をもってその発達史もあとづけることができると思う。そうすれば、他の分野に研究を広げていっても、ここで体験したフィールド・ワークがずい分役立つと思う。このような形で本書は利用できるであろう。その点、本書が非売品であるのは残念なことである。

III

最後に二、三の希望事項をのべておこう。

このような大著を読み切るのは、大変な労力を要するし、いったん読んだことを覚えておくことは、まずできない相談である。初めて参照する際はもちろんのこと、二

度目に目的あって利用する際にも、索引があったら如何ほど便利であろうか。事項索引がまずほしいが、そのほか人名・地名索引があれば更に便利になる。多大の労力を要することなので、むつかしい要望であることは分っているが、これらがあれば、本書の利用度は一段とましたにちがいない。(年表があると更によいのだが、これは史料集に求めるべきことではないかも知れぬ。)

つぎに史料所蔵者の住所等が簡略すぎて、一層の研究を志すものが、史料所蔵者を尋ねようとしても、分らない場合がある。たとえば上巻の史料番号24, 26, 29, 40などの史料は所蔵者名はあっても住所が不明であるし、42の史料は「藍間屋組合文書」となっているが所蔵場所が不明である。出所を示した以上は、所蔵場所も示してほしい。

私は、この紹介のなかで、二、三の注文をつけたが、これらはほんの細かい事柄であって、この貴重な史料集の刊行の意義の高さを減ずるものでは、決してない。このような史料集を刊行された関係者の御尽力に深く感謝の意をあらわしておきたい。

三木産業株式会社の住所 771-02 徳島県板野郡松茂町中喜来字中須